



いつも訪問する発電所内食堂での昼食時風景である。

厨房側に立つおねえさんの前に調理した料理の容器がならぶ。

これを指させば、ご飯が盛られた大皿の隣に添えてくれる。

言葉が通じなくても大丈夫。

「もっとたくさん」あるいは「少し」などが必要な場合、若干の身振りをつけて叫べば雰囲気は伝わる。

そして、この皿を、親父の前のテーブルに置く。

この親父は生意気にも英語を使い、査定結果をサーティ・ファイブ・パーツ（約100円）などと言う。

ただし、ややこしいときは電卓で示しニコツとする。

また奥の列の並びは、麺を食しようとする人々である。

数種類の麺メニューが写真つきで掲示してあり、これを指すだけでこと足りる。

難点は茹でる分だけ若干、時間がかかること。

さて、これでテーブルに運んで摂取開始の段となる。

これが実に美味しい。

ここが特別に美味しいのではなく、タイ料理自体が何でも美味しく、ここも例外ではないということである。

タイに来て良かったと、喜びも噛みしめる。